

歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形

—迂言的未来形 *allait + infinitif* との比較—

小川 紋奈

1. はじめに

過去に実際に起こった歴史的な出来事に関して語る歴史テキストというジャンルにおいて、一般的にわれわれが用いられると思われ浮かべる動詞時制は、過去時制であろう。しかしながら、たとえば発話時から後に未確定の事行を位置づける場合に用いられるとされる単純未来形 (*futur simple*、以降 FS と略記する) の使用もしばしばみられることもある。さらに、迂言的未来形 (*futur périphrastique*、以降 FP と略記する) : *va + infinitif* (便宜上 *futur périphrastique présent* とし、以降 FP-PR と略記する) や *allait + infinitif* (便宜上 *futur périphrastique imparfait* とし、以降 FP-IMP と略記する) も同じテキスト内にて同様に未来の事行を示す際に用いられていることは稀ではない。(1) では、一つのパラグラフ内において複数の種類の未来形が用いられている。

(1)

C'était rejeter la Bourgogne dans l'alliance anglaise. Il semble pourtant que Philippe le Bon, fils de Jean sans Peur, ait quelque temps hésité. Cependant l'Université de Paris, qui d'ores et déjà a élaboré la théorie de la « double monarchie » mettant France et Angleterre sous une même couronne, celle du roi anglais, a dépêché dès le mois de mars 1420, à Troyes où se trouvent Charles VI et Isabeau de Bavière, « quelques notables personnes », entre autres Pierre Cauchon, « maître ès arts et licencié en décret », qui vont pousser activement les négociations avec le roi d'Angleterre ; et c'est finalement, le 21 mai 1420, ce traité de Troyes qui élimine du trône le dauphine légitime, accuse d' « horribles et énormes crimes », et décide que « la couronne et royaume de France, avec leurs droits et appartenances, demeureront et seront perpétuellement de notre fils le roi Henri et de ses hoirs (héritiers) ». Charles VI et Isabeau conservent leur vie durant leurs droits et dignité de roi et reine ; Henri V de Lancastre épouse leur fille Catherine de France ; à l'enfant qui naîtra de ce mariage est promise la double couronne de France et d'Angleterre. Le mariage allait être célébré le 2 juin suivant à Troyes. Henri V fera avec Charles VI, le 1^{er} décembre 1420, dans Paris, une entrée solennelle ; (...)

(*Jeanne d'Arc*, 第1章, pp.10-11)¹

(この事件は、ブルゴーニュ公を決定的にイギリスとの同盟に追いやることになった。だが、ジャンサン・ブールの息子のフィリップ・ボンはややためらったかに見える。しかしこの時すでにフランスとイギリス二ヶ国を、一王家すなわちランカスター王家のもとに置く<二元王国>の理論を準備していたパリ大学は、一四二〇年三月になると、急遽シャルル六世お

¹ 以降, *Jeanne d'Arc* は JDA と略記する。

よび王妃イザボーがいたトロワに「数人の優れた人物」を派遣した。この中に「教養学士兼教会法学士」ピエール・コーションなる人物がいて、イギリス王国との折衝を熱心に推し進めている。こうしてついに一四二〇年五月二十一日、正統な王太子を王位継承から除外し、「恐るべき、途方もない犯罪」と弾劾されたあの「トロワ協定」が生まれることとなる。この協定は「フランス王国の王位は、それに付随する諸権利および諸々の物件と共に、以後永久に我らが息子となる国王ヘンリーおよびその後継者に属するものとする」と規定している。この協定によりシャルル六世と王妃イザボーは、生きている限りは国王及び王妃の権利と栄誉を保有しうるであろう。ランカスター家のヘンリー五世は、シャルルとイザボーの娘カトリヌを妃に迎えてその婿となり、この結婚から生まれるべき王子はフランスおよびイギリス王国の二重の王位を約束されることとなったのである。結婚式はトロワの町で六月二日に挙行された。一四二〇年十二月一日、ヘンリー五世はシャルル六世を伴って華々しくパリに入城した。(…)) (JDA 和訳書第1章, p.16)²

このように、過去の出来事を語る際に用いられる未来形の機能とそれを可能とするメカニズムに関して、小川 (2016) では FS の一用法として一般的に分類されている歴史的用法 (*futur historique*、以降 FH と略記する) に焦点をあて分析し、FP-PR と比較した。本稿では、コーパスとして *La Proclamation de la Commune* と *Jeanne d'Arc* を使用し、³ さらに FP-IMP と比較し、歴史テキストというジャンルで用いられた際の機能的・構造的差異を明らかにすることを試みる。

2. 歴史テキスト内で未来を語る時制の定義と各出現率

2. 1. FH の定義

FH に関する先行研究は数多くはないが、Barceló et Bres は、以下のように述べている。

(2)

(...): le locuteur transporte fictivement le moment du passé dans le *nunc*, d'où il peut considérer l'événement comme futur. (Barceló et Bres, 2006, p.111)

((...) 語り手は現在に過去のときを虚構的に導いており、その現在では出来事を未来とみなすことができるのである。)

彼によると、語り手は過去のある時を仮の現在とする虚構的な時間性を構築し、その過去に付随する事行を仮の現在に立脚することで FH を用いて事行を提示できる。虚構的時間性の構築が FH の使用可能を導いている。また、Wagner et Pinchon は以下のように観察している。

² 以降、JDA 和訳書とは、『ジャンヌ・ダルクの実像』(1995) を指す。

³ *La Proclamation de la Commune* は、著者の意見や考え等が多い章以外の、第4部から第7部第2章までをコーパス対象とする。

(3)

Par ce tour, le narrateur crée un décalage expressif dans un récit dont les verbes sont à un temps du passé ou au présent historique. Fort de ses connaissances il évoque au moyen du futur des faits qui sont passés par rapport à lui, mais qui étaient à venir par rapport au moment où se situe l'histoire racontée :

(Wagner et Pinchon, 1962, p.349)

(ここでは、語り手は、動詞が過去時制か歴史的現在である語りにおいて、表現的なずれを作り出す。自身の知識に支えられ、語り手は、自分にとっては過去であるが、物語られた歴史が位置づけられる時点と関連し未来であった事行に対して、未来形を用いて言及する。)

ここでは語り手の知識に基づいて、語り手にとっては過去だが語られる歴史が位置する時点に対しては未来である事行を、未来形を用いて言及するとしている。したがって、歴史的叙述における FS、つまり FH は、著者の現在時の知識に基づいて回顧的な見方 (rétrospectif) をするのではなく、前望的な見方 (prospectif) での語りであることを暗示すると思われる。

2. 2. FP の定義

FP-IMP に関する先行研究はほぼみられないが、FP に関する先行研究では、Imbs は以下のように述べている。

(4)

Aller + infinitif sert à exprimer le *futur proche*, c'est-à-dire un futur qui est en contact immédiat et en continuité avec le présent.

(Imbs, 1960, p.55)

(Aller + infinitif は、近い未来を表す役目を果たす。その未来とはつまり、現在と接触し連続している未来である。)

(5)

(...), l'avenir est considéré comme distinct du présent ; mais à l'aide du verbe aller employé au présent, je construis un pont entre le présent et l'avenir (*aller* suggère le chemin qui relie les deux divisions du temps). (...), c'est le présent qui est ici inclus dans l'avenir, (...).

(ibid., p.56)

((...) 未来は現在と明確に異なると考えられる ; しかし現在形で用いられる aller という動詞により、現在と未来との間に橋を構築する (aller は二つに分かれた時をつなぐ道を暗示する)。

(...) ここでは現在が未来のなかに含まれている。)

彼が指摘しているように、一般的に FP は aller で示される現在と隣接した連続性が特性だと言われている。また Leeman-Bouix は、(6) のように現在時点で既に FP で示される事行の実現が始まっている状態だと述べている。

(6)

Le futur périphrastique engage donc la réalisation dans le présent. (Leeman-Bouix, 2002, p.162)

(迂言的未来形は、したがって、現在における実現を開始する。)

(7)

Le futur périphrastique ne correspond pas nécessairement à un procès immédiat objectivement, mais il le présente comme tel pour en garantir la réalisation (...). (ibid., p.163)

(迂言的未来形は必ず客観的に即時である事行に一致するわけではないが、実現を保証するものとして事行を提示する。(...))

つまり、Leeman-Bouix によると例えば既に事行の実現のために何らかを準備し始めている等、FP を用いた時には現在の状況で既に何らかの兆しがあるため、その事行の実現は保証されたものとして示されるということである。このことに関しては、Maingueneau も同様に (8) のように述べている。

(8)

(...) l'énonciateur présente le procès comme déjà déclenché, dans le prolongement de la situation présente (...). (Maingueneau, 2010, p.121)

((...) 発話者は、現在の既に作動しているものとして事行を現在の状況の延長線上に提示する。)

彼はさらに、語りにおける未来の時の位置づけに関して次のように述べている。

(9)

(...), elle [=histoire] ne connaît pas de présent, de passé et de futur. Il existe néanmoins des tournures destinées à anticiper sur la suite des événements : (...). (ibid., p120, [...] 内は本稿筆者による)

(語りには現在も過去も未来もない。しかしながら出来事の続きを先取りするという展開が存在する。)

つまり、語りにおいて未来形で表されているものは未来ではなく、語りの展開のなかで時に発生する事実の先取りである、ということである。

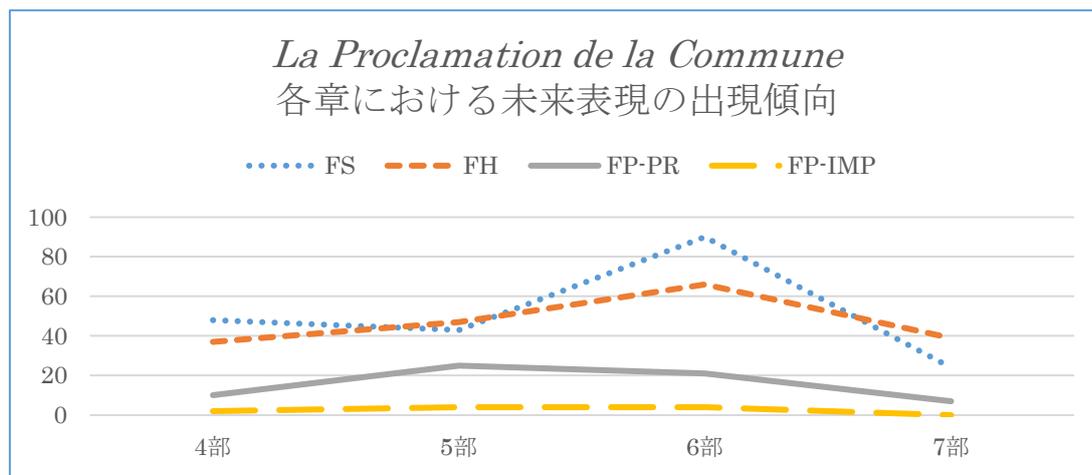
2. 3. コーパスにおける未来形の統計表

コーパスとして使用する二つのテキスト *La Proclamation de la Commune* と *Jeanne d'Arc* に出現する FS, FH, FP-PR, FP-IMP の出現数を調べ、グラフ化したものが下の表 A・図 A と表 B・図 B である。

表 A *La Proclamation de la Commune* の単純未来形と迂言的未来形の出現数

	FS	FH	FP-PR	FP-IMP
4部	48	37	10	2
5部	43	47	25	4
6部	90	66	21	4
7部	24	39	7	0

図 A *La Proclamation de la Commune* における未来表現の全体的な出現傾向

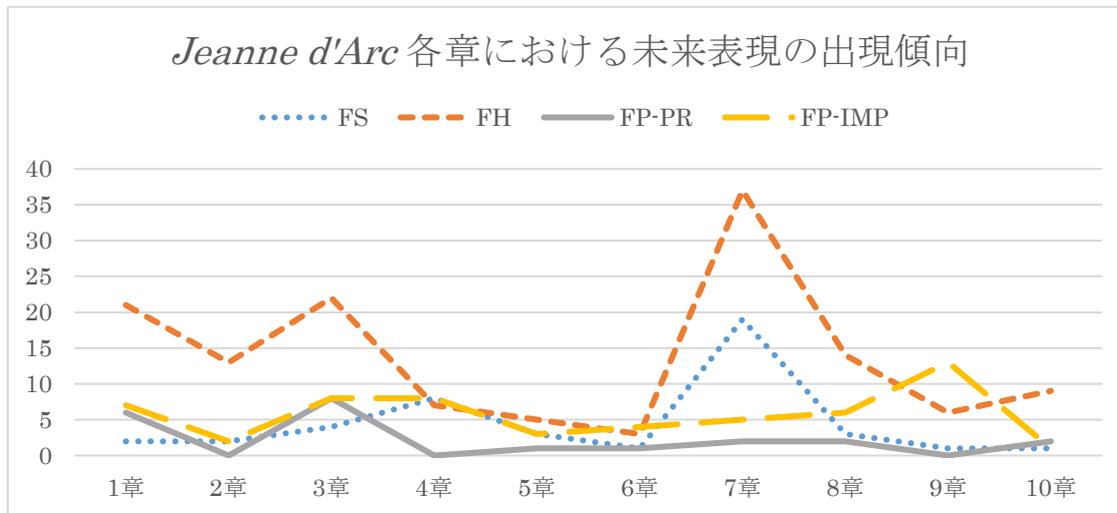


このコーパスでは、著者の意見や会話、手紙等の語りでない部分で用いられる FS を除く 3 つの中で、最も未来表現として使用されているのは FH である。したがって、3.1.で提示する Benveniste の表が示す、histoire (語り) での未来形は FP-IMP が用いられるという説とは矛盾している。また、クライマックスとなり得るテキストの終盤にかけて多数出現する FH とは異なり、二つの迂言的未来形は各章ごとの出現頻度に大きな差はみられず、テキスト全体として観察した場合の固有の特徴はここからは観察できない。

表 B *Jeanne d'Arc* の単純未来形と迂言的未来形の出現数

	FS	FH	FP-PR	FP-IMP				FS	FH	FP-PR	FP-IMP
1章	2	21	6	7			6章	1	3	1	4
2章	2	13	0	2			7章	19	37	2	5
3章	4	22	8	8			8章	3	14	2	6
4章	8	7	0	8			9章	1	6	0	13
5章	3	5	1	3			10章	1	9	2	1

図 B *Jeanne d'Arc* における未来表現の全体的な出現傾向



このコーパスでも、語りの中の未来形としてFHが主に用いられていることが明らかである。次に多く使用されているのはFP-IMPである。FS (FH) の使用頻度が顕著であることから、同じ discours レベルに分類されているFP-PRの使用が次に多そうという自然な予想とは異なる結果である。したがって、それはFP-IMPが固有の特性を有しているためであると考えられるだろう。

3. 語りの時制のメカニズムと具体例

3. 1. 語りの時制の仕組み

Benveniste (1966) は、discours (発話) / histoire (語り) という二つのレベル区分を提示し、それぞれのレベルでは、用いられる動詞時制が異なると主張している。対話者の存在を前提とする discours に対して、histoire は対話者が存在せず主観相をもたない。歴史テキストは histoire に属するジャンルである。

表 C

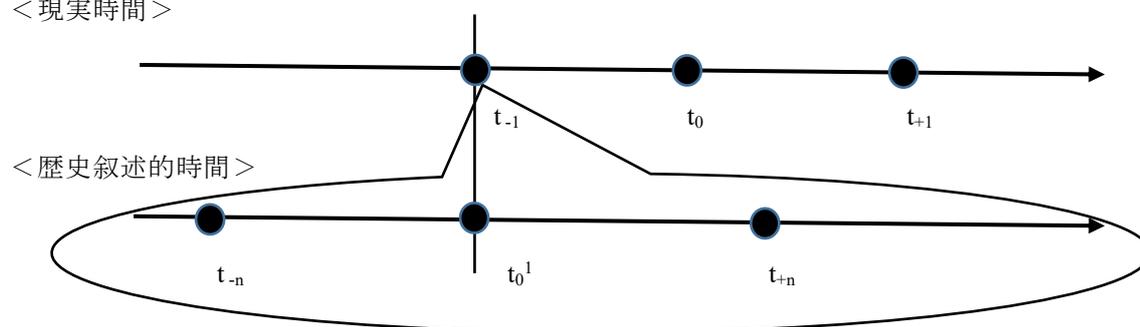
discours		histoire (récit)	
passé composé	imparfait	plus-que-parfait	imparfait
présent		passé simple	
futur simple	futur périphrastique	prospectif (allait / devait + inf)	conditionnel

実際に歴史テキストを観察すると、必ずしも歴史テキストの語りが表 C の histoire に分類されている動詞時制のみで構成されているわけではないことがわかる。表 C では、本来 FS は histoire のジャンルである歴史テキストには出現せず、未来を表す際にはFP-IMPを用いると

されている。したがって、FP-IMP の出現には違和感はない。また、小川 (2016) の分析より、歴史叙述的時間軸という概念の導入により、基準時を表す歴史的現在に立脚した際の FS (FH) や FP-PR の使用は妥当性があるとした。ここでは、過去時制をベースとした語りにおける FP-IMP は、現在時間軸上での語りであるとしている。図 C はこれら時間軸と時間性を示したものである。現実時間とは、われわれの日常の時間であり、われわれは常に現在時 t_0 に位置し、時間は t_{+1} の方向へ進行し、その逆が過去 t_{-1} である。歴史叙述的時間とは、現在を基準とした時間の互いの位置関係は現実時間と同様だが、基準時を擬似的に発話時 t_0 に準ずる時点として t_0^1 と表し、これは現実時間の t_{-1} に値する。

図 C

< 現実時間 >



しかしながら、例文 (1) のように、現在時間軸上での未来形 FP-IMP と、歴史叙述的時間軸上での FP-PR や FS (FH) が同パラグラフ内での出現がみられることがある。この矛盾に関しては、以下で詳しく分析していく。

3. 2. FH の出現例

ここからは、具体的な例文を用いて観察していく。3. 1. でみたように、本来 *histoire* (語り) では用いられないとされる FH は、歴史的時間軸の導入により使用可能となる。

(10)

En haut de la rue Lepic, le Comité central et le comité local de la rue des Rosiers avaient installé une pièce d'alarme. Toujours prête, la ficelle ne quittait pas l'étoupille et la sentinelle devait tirer le coup à blanc dès la première alerte. Le coup d'alarme ne fut pas tiré, on ne sait pourquoi. Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tom Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux ; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive?, et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent; il tombe, mortellement blessé, et mourra quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61^e bataillon. Ils se portent alors vivement vers le n° 6 de la rue des Rosiers, siège du comité de vigilance,

et font prisonniers quelques-uns des 18 hommes qui l'occupent et les jettent dans les caves de la tour Solférino. D'autres arrivent à fuir en tirant quelques coups de fusil.

(*La Proclamation de la Commune* 第5部2章, p.241)⁴

(ロジエ街の中央委員会と地区委員会は、一門の警砲をルピック街の高みにすえつけた。いつでも発射できるように紐が大砲の門管につけられていたし、歩哨は最初の急報があり次第すぐ空砲をはなつはずであった。だが警砲はなぜかわからないが発射されなかった。暗闇にまぎれて市警官たちはビュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る。突然人影が彼らの前に立ちふさがる。それは、ロジエ街の委員会から見張りに立つようと命ぜられた国民衛兵のテュルパンである。「誰か」と彼は叫び、銃剣をつき出す。すぐさま憲兵たちは彼を打ち倒す。彼は瀕死の重傷を負って倒れ、数日後には死ぬ。襲撃者たちはそこで丘の上に出て、手うすな哨所である第六一大隊の六人を難なく武装解除する。) (LPC 和訳書『下』, p.54)⁵

FHの分析に関しては、小川(2016)で詳しく行っているため、そこで明らかになった傾向を述べておく。まず、Imbs(1960)が「この未来形は、出来事の上での跳躍を表し、語りの展開において断絶をもたらす。」⁶と述べているように、語りの展開における断絶という性質を有する。これは、以下の4つのテキスト上での特徴を説明しうるだろう。

1. FHがパラグラフや章の終りにしばしば用いられる。これは、III. 1.の歴史叙述的時間軸上において prospectif な視点から、FHに至るまでのいくつかの事行を恣意的にひとまとまりとして捉え、叙述の方向性の提示と叙述の終着点を示す働きをしている。

2. 丸括弧 (parenthèse) や — (tiret)、; (point-virgule) や : (deux-points) 等の補足説明の記号と用いられることも多くみられる。継起的な事行の展開から離脱し、筆者が時には後に起こる事行を先取りし補足説明するこれらの記号とは親和性が高い。

3. FHが連続して用いられる場合がある。これは Flash back を時間的に反転したものであり、未来に発生する出来事のまとまりが先取りされて読み手の眼前に提示され、その瞬間はこれまでの流れから離脱し一種の世界を構成する。

4. 時間的副詞とともに用いられることが多い。(10)では quelque jours plus tard との共起により、これ以前のなだらかな出来事の継起とは異なり、時間副詞を伴って後の出来事に一気に跳躍している。FHで示されている文の後の事行はFHの文の前の事行と繋がっており、継起的な展開からの離脱を示す性質が観察できる。

3. 3. FP-PR の出現例

FHと同様に一般に discours レベルに属すると言われる FP-PR も、3. 1. で提示した歴史叙

⁴ 以降 *La Proclamation de la Commune* を、LPC と略記する。

⁵ 以降 LPC 和訳書は、『パリ・コミューン』(2011)を指す。

⁶ Il représente un bond par dessus les événements, il opère une rupture dans le déroulement du récit, (...). (Imbs, 1960, p.46).

述的時間軸の導入により使用が可能となる。つまり、現実時間では過去にあたる事行を、歴史叙述的時間軸で基準時の現在として歴史的現在で表し、そこに立脚することによって FP-PR は用いられる。しかし、この二つは同じく未来の事行を表すが明確な性質的違いを有し使い分けられている。

(11)

Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui **ne se séparera que** vers 2 heures du matin, au moment où **vont commencer** les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3000 gendarmes. Il a immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir. (LPC 第 5 部 2 章, p.236)

(この間に (零時)、実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する。この会議は作戦がいよいよ開始される瞬間、午前二時ごろにやっ**と**解散されるだろう。ティエール氏は二日前からパリに来ていた。パリで彼が見つけたのは、武装した一万二〇〇〇人の兵士 (ファロン師団) と三〇〇〇人の憲兵だけであった。彼はただちにビスマルクから、軍隊を四万人に引き上げる許可を獲得した。彼は三月二〇日に、国民議会の前に姿を現わさなければならない。この期限は近づいている。ティエールは行動を急ぐ。) (LPC 和訳書『下』, p.46)

この例は、FH と FP-PR の特徴の違いがわかりやすい例である。双方とも午前 2 時ごろという同じ時に起こった事行である。「会議が軍隊の配置を決定する」という歴史的現在で表される時を基準時とし、FP-PR は「作戦がいよいよ開始される」という、既にその準備が動いている切迫性と、動いているその基準の現在時に隣接した連続性が感じられる。一方 FH を用いた「会議が解散されるだろう」は、「会議が軍隊の配置を決定する」との緊密性は感じられず、断絶という性質からもたらされる潜在的可能性が提示される。つまり現段階ですでに動いている兆しがあるわけではなく、FH で示される事行の実現には現実味がない不安定な印象を与える。歴史テキストは著者の知識に基づくため、著者にとっては FH を使用しても完全に起こる確実な事行である。しかしながら読み手にとっては、FP-PR は、事行実現に至る動きが感じられるため臨場感があり近い未来の印象を持ち、一方 FH は、断絶により実現までの動きや過程の提示なしに孤立的に示されるため、現実性の感覚がわからない遠い心的距離感を与えるのかもしれない。つまり、事行に向かう動きとしては、動の FP-PR と静の FH と言えるかもしれない。これは以下の図 D・図 E の焦点の差異によるとわかりやすいだろう。丸は焦点を表す。図 D の FP-PR では焦点は現在から事行の発生まで連続してその過程も含むのに対し、図 E の FH は、基準時である現在とは断絶 (rupture) し、現在とは異なる未来という時の中で生ずる事行のみに焦点が当てられる。この断絶を伴う時間世界の移行が、読み手に心的距離を生み出していると考えられる。

図 D : FP-PR

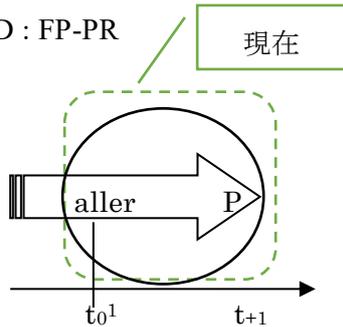
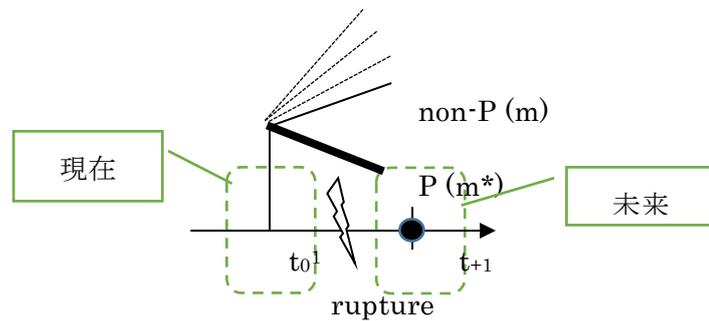


図 E : FH



同じ未来形というくくりではあるが、FH は未来という時が構築された中での事行、FH-PR は現在時に既に動きが開始されているため、後の事行が現在に組み込まれたもの、現在に属するものと捉えることができるかもしれない。

3. 4. FP-IMP の出現例

構造的には、基本的に FP-IMP は FP-PR と同様の特質を有すると考えられる。つまり、同様に aller が現在との隣接・連続性を暗示する。進行方向も allait が過去形だからといって過去の方なわけではなく、前望的な未来の方向である。

出現傾向の点では、FP-IMP は FH と同様な点も見られる。時間副詞との共起や、パラグラフや章の終わりにも用いられやすいという点である。しかしながら、異なる点ももちろんある。例えば時間副詞との共起は、FH の場合継起的な展開からの離脱し、その時間副詞の時に達成される事行のみの提示であるが、FP-IMP の場合、時間副詞の時に達成されるために前にすでに実現に向けた動きがあることを暗示する。例えば、後に観察する (1) がそうである。FH で表される「この結婚から生まれる王子は...約束されることとなった」は未だ結婚していません。仮定の話の中のため何の兆しもなく、将来達成されることになる事行の提示のみに対して、FP-IMP で表される「結婚式は六月二日に挙行された」は、時間副詞の前に既にそうな流れがあり、その時間副詞の時にようやく達成されるというニュアンスである。また、FH と異なる FP-IMP の特徴としては、パラグラフのはじめにも出現することが比較的多いということが挙げられる。Jeanne d'Arc では、FP-IMP の出現中だいたい五分の一の割合で用いられている。これは、断絶という性質がなく、図 E のように焦点が広く事行の動きを含めた連続性を示すため、これから継起的な展開が始まることを先取りして明示しやすいためではないかと考えられる。さらに、特にコーパス *La Proclamation de la Commune* で良くみられた、流れからの離脱・挿入のマーカである丸括弧と FH の共起が、2 つのコーパス内の FP-IMP ではまったく見られなかった。これもやはり、FH の断絶と FP-IMP の連続性という性質の違いが理由なのではないかと思われる。

以降はコーパスの例に沿って見ていく。まず、次の (12) は過去形ベースのパラグラフであ

り、条件法もみられる例である。

(12) : 過去ベース、条件法との共起

Sa première étape est Auxerre le lendemain. La ville avait une garnison bourguignonne ; les troupes royales **allaient camper** trois jours sous ses murs tandis que se déroulaient des pourparlers qui faisaient mal augurer de la suite des événements : finalement les gens d’Auxerre fournirent vivres et denrées, mais n’ouvrirent pas leurs portes et s’engagèrent seulement à tenir la même conduite que celle que **tiendraient** les bourgeois de autres villes sur le parcours : Troyes, Châlons et Reims.

(JDA, 第 4 章, p.52)

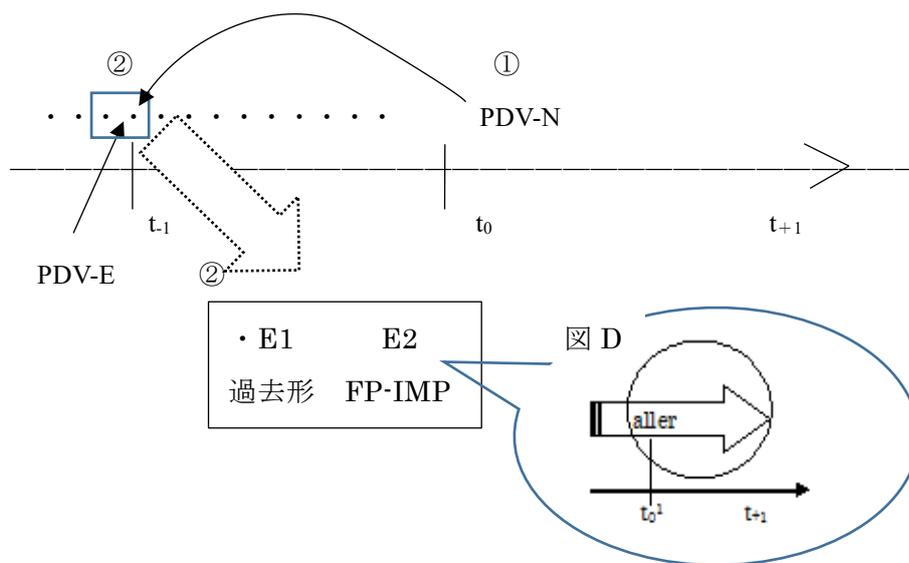
(最初の重要な目標となる町は翌日着いたオーセールであった。この町にはブルゴーニュ派の守備隊が置かれていた。王太子の軍は町側との折衝が行われる間、町の城壁の下で三日間**幕営しなければならなかった**。交渉は事態の見通しを明るくするものではなかった。ともかくもオーセールの市民たちは、食料の供出は行ったが町の門は開くことはせず、単に予定された行程上の町々、トロワ、シャロン、ランスと同じ行動をとることだけを約束したにとどまった。)

(JDA 和訳書, p.66)

3. 1. で触れたように、Benveniste が提示した *histoire* における未来のひとつは、FP-IMP であった。また過去における未来は一般に条件法を用いるとも言われている。(12) の例では、この二つが出現している。ここでの条件法 *tiendraient* は、単純過去形 *s’engagèrent* との時制の一致によるものとなっている。このように過去における未来は条件法だと思われる理由の一つは、過去の事行は通常過去形で述べられるため、その時制の一致で FS の代わりに条件法が用いられるためであると思われる。歴史テキストにおける未来を表す条件法は時制の一致以外にも出現するが、それについては別の機会に論じることとする。しかし条件法との共起は不思議ではないことを見ていく。ここでは過去形ベースで語られている。したがって、基準時が歴史的現在で示される歴史叙述的時間軸ではなく、FP-IMP は書き手や読み手が現実時間軸上の現在 t_0 からの視点 (*point de vue du narrateur*, PDV-N, ①) をもって *rétrospectif* (回顧的) に事態 (*événement*, E) を捉えている語りであることがわかる。したがって、図 F のように、読み手に実際に起きたことを振り返っているというリアリティを伴って事行を見ているイメージを与える。図 F の E2 は FP-IMP で表されている事態を、E1 は E2 の事態の立脚元となる過去の事態を指している。この E1 は必ずしも FP-IMP の直前に書かれている事態というわけではなく、また非明示の場合もあり、文脈から推測することもある。(12) では、「翌日オーセールに到着した」という事態が E1 に、「三日間幕営しなければならなかった」という事態が E2 に該当する。

図 F

< 現実時間 >



※図 D は、歴史叙述的時間軸上で、基準時 t_0^1 における事行が歴史的現在で表される FP-PR の図だが、FP-IMP では、同様の特質は保持するが現実時間上のため、基準時 t_0^1 における事行は過去形で表される。

Benveniste (1966, p.241) は歴史叙述とは、「ここには誰も語るものはいない；出来事自身のみずから物語るかのようである」と述べている。この説から、自ら語る出来事自身の PDV (point du vue de l'événement, PDV-E, ②) が t_{-1} に存在し、その PDV (t_{-1}) において基準時と隣接し連続した未来を FP-IMP は示すと考えられる。PDV-E は前後の連続した展開のみに当てられるため、FP-IMP が暗示する連続性と確実さも包括する。このように、歴史叙述的時間軸上で一つの視点から捉えられる FP-PR と、現実時間軸上で2つの視点から捉えられる FP-IMP にはメカニズム上明確な差異があると言えるだろう。FP-PR と同じレベルの FH も同様である。

(13)：過去形ベース、FH との共起

Ce dernier itinéraire la fera passer ensuite par Sainy-Valéry-sur-Somme, Eu, Dieppe et enfin Rouen où elle a dû arriver vraisemblablement la veille de Noël 1430. Elle fut enfermée dans une tour du château de Bouvreuil, jadis construit par Philippe Auguste, où résidait Richard Beauchamp, comte de Warwick, précepter du petit roi d'Angleterre Henri VI et gouverneur de Rouen, qui **allait**, pendant les cinq mois à venir, **être** « le geôlier de Jeanne d'Arc ». (JDA, 6 章, p.70)

(最後の旅程でジャンヌはこのあとサン・ヴァレリー・シュル・ソムム、ユー、ディエップの町を通過しており、ルーアンに到着したのはおそらく一四三〇年のクリスマスの前の晩であったらしい。彼女はここでブーヴルイユの城に閉じ込められるが、この城はその昔国王フィリップ・オーギュストが建設したもので、この時点では、幼いイギリス国王ヘンリー六世の

お守り役で、ルーアンの守備司令官であったウォーリック伯リチャード・ビーチャムが居住していた。彼はこれ以後の五ヶ月間を「ジャンヌ・ダルクの牢番」を勤めて過ごすことになる。) (JDA 和訳書, p.90)

ここでは、同パラグラフ内に FH と FP-IMP が共起している。先ほど述べた FP-PR と同様に、FH もまた歴史時間軸上で一つの視点から捉えられるため FP-IMP とはメカニズムが異なる。したがって、この二つが共起しているということは、興味深い例である。(13) では、過去形ベースで現実時間軸上からの回顧的な視点での語りに、歴史叙述的時間軸の FH が挿入されていると考えることができる。FP-IMP の「これ以後の五ヶ月間を...過ごすことになる」では、知識と共に回顧的に見ることでその事行の動きに注目することになる。「今後5ヶ月過ごす」という事行の実現に対して兆しを伴った確実なものとして生き生きとした現実性を帯びることになる。対して FH の「このあと...通過する」は、FP-IMP とは異なり、虚構的な歴史叙述的時間軸上での基準時となる現在時に立脚した視点を有し、図 E のように断絶した先の未来を示すため、実現までの動きや過程のほのめかしがなく事行のみが孤立的に提示され、一連の展開があろうとなかろうとそこで示される事行が達成したという先取りのみを提示するような印象を与える。FH は単なる事行の提示、FP-IMP は事行の提示と共にその動きを暗示する機能を有するだろう。

つづいて、現在形ベースの文連鎖のなかにも出現することが可能なことがわかる例を見てみる。

(14)：現在形ベース

A peu près en même temps, un adjudant passe dans les postes de la garde à Montmartre. Il est porteur d'un ordre (faux) d'évacuation signé du maire : Clemenceau. On obéit. Grâce à cette ruse, sept hommes seulement restent pour garder 171 pièces d'artillerie qu'allait attaquer un corps d'armée, plus un petit détachement au Moulin de la Galette. (LPC, 第5部2章, p.235)

(ほとんど同じ頃、一人の特務曹長がモンマルトルの衛兵の哨所に立ちよる。彼は、区長クレマンソーの署名のある (にせの) 撤退命令の伝令である。人々は従う。この計略のおかげで、軍団が攻撃しようとしていた。一七一門の大砲を守るために、たった七人と、ムーラン・ド・ラ・ギャレットにいるわずかな分遣隊が残ったにすぎない。) (LPC 和訳書『下』, p.43)

この例では、歴史叙述的時間軸上での語りの途中で、現実時間軸上の現在からの回顧的視点とともに FP-IMP が挿入されていると考えられる。すべてが歴史叙述的時間軸上の語りだとすると、過去形である FP-IMP の事行はその事行の現在よりも前に発生していることを意味する。しかしながら、(14) では、明らかにそれまでの現在形で示されている事行よりも後に起こった事行が FP-IMP を用いて表されている。したがって、ここで現実時間軸上からの視点が挿入されていると考えられる。挿入されたとしても、図 C のように歴史叙述的時間軸

の事行は本来現実時間軸上の過去のものに値するため、歴史叙述的時間軸上の一事行を現実時間軸上での基準時とし、FP-IMPはその基準時との隣接性と連続性を提示する。本稿の最初に提示した例である次の(1)も同様である。

(1): 現在形ベース、FH や FP-PR との共起

C'était rejeter la Bourgogne dans l'alliance anglaise. Il semble pourtant que Philippe le Bon, fils de Jean sans Peur, ait quelque temps hésité. Cependant l'Université de Paris, qui d'ores et déjà a élaboré la théorie de la « double monarchie » mettant France et Angleterre sous une même couronne, celle du roi anglais, a dépêché dès le mois de mars 1420, à Troyes où se trouvent Charles VI et Isabeau de Bavière, « quelques notables personnes », entre autres Pierre Cauchon, « maître ès arts et licencié en décret », qui vont pousser activement les négociations avec le roi d'Angleterre ; et c'est finalement, le 21 mai 1420, ce traité de Troyes qui élimine du trône le dauphine légitime, accuse d'« horribles et énormes crimes », et décide que « la couronne et royaume de France, avec leurs droits et appartenances, demeureront et seront perpétuellement de notre fils le roi Henri et de ses hoirs (héritiers) ». Charles VI et Isabeau conservent leur vie durant leurs droits et dignité de roi et reine ; Henri V de Lancastre épouse leur fille Catherine de France ; à l'enfant qui naîtra de ce mariage est promise la double couronne de France et d'Angleterre. Le mariage allait être célébré le 2 juin suivant à Troyes. Henri V fera avec Charles VI, le 1^{er} décembre 1420, dans Paris, une entrée solennelle ; (...) ⁷

(JDA 第1章, pp.10-11)

(この事件は、ブルゴーニュ公を決定的にイギリスとの同盟に追いやることになった。だが、ジャンサン・ブールの息子のフィリップ・ボンはややためらったかに見える。しかしこの時すでにフランスとイギリス二ヶ国を、一王家すなわちランカスター王家のもとに置く<二元王国>の理論を準備していたパリ大学は、一四二〇年三月になると、急遽シャルル六世および王妃イザボーがいたトロワに「数人の優れた人物」を派遣した。この中に「教養学士兼教会法学士」ピエール・コーションなる人物がいて、イギリス王国との折衝を熱心に推し進めている。こうしてついに一四二〇年五月二十一日、正統な王太子を王位継承から除外し、「恐るべき、途方もない犯罪」と弾劾されたあの「トロワ協定」が生まれることとなる。この協定は「フランス王国の王位は、それに付随する諸権利および諸々の物件と共に、以後永久に我らが息子となる国王ヘンリーおよびその後継者に属するものとする」と規定している。この協定によりシャルル六世と王妃イザボーは、生きている限りは国王及び王妃の権利と栄誉を保有しうるのであろう。ランカスター家のヘンリー五世は、シャルルとイザボーの娘カトリヌを妃に迎えてその婿となり、この結婚から生まれるべき王子はフランスおよびイギリス王国の二重の王位を約束されることとなったのである。結婚式はトロワの町で六月二日に

⁷ 例文(1)内の一文「(...) demeureront et seront perpétuellement de notre fils le roi Henri et de ses hoirs (héritiers)」に出現する *demeureront* と *seront* は、「トロワ協定」の内容であり、FHではなくFSである。したがって、ここでは分析対象外である。

挙行された。一四二〇年十二月一日、ヘンリー五世はシャルル六世を伴って華々しくパリに入城した。(…)

(JDA 和訳書第1章, p.16)

ここでも現在形ベースで語られており、歴史叙述的時間での語りである。したがって FH や FP-PR の出現もある。FP-IMP で表されている事行は、そこに現実時間軸が挿入されているということである。なぜ現実時間軸を挿入してFP-IMP で述べるのかに関しては、「...した」という過去がもつ実際に現実には起きた事行であるという印象を強く与えるためではないだろうか。それまでの時間性を有さない歴史的現在による淡々とした事実の提示の、物語を聴いているような語りの中で、ふと視点が現実からの回顧的に変わり、読み手にリアリティをもたらす効果があるのではないかと思われる。

以上のように、2つの時間軸が混在した語りは、テキストにスパイスを与え、読み手をひきこむ効果があると考えられる。

4. おわりに

本稿では、歴史テキストにおける各未来形の特徴と成立のメカニズムを考察した。その結果以下のことが明らかになった。まず、テキスト全体のレベルから見ると FH は終盤の山場となりそうなあたりに頻繁に使用されているのに対して、FP-PR、FP-IMP ともにテキスト全体における特別な特徴は見られなかった。次に、文レベルからみると、FH はパラグラフの終わりに比較的多く用いられているのに対して、FP-IMP はパラグラフのはじめにも出現している。これは、FH の場合、断絶という性質から叙述の流れの終着点になりやすいという特徴、FP-IMP の場合、基準時との連続性という性質から章で語られる事行が始まったという印象を示しやすいという特徴と、現実時間軸から始まることで読み手にこの先語られることに対する現実感を与えるという特徴に由来するものだと思われる。構造的視点からは、FH や FP は歴史叙述的時間軸と1つの視点からなるのに対し、FP-IMP は現実時間と歴史叙述的時間の2つの時間軸と各時間軸からの2つの視点から成り立っていることを示した。特質面からは、FH は静の未来であり、歴史叙述的時間上での断絶による時間性の移行と焦点からなる遠い心的距離感に対して、FP-IMP は動の未来であり、現実時間軸の現在からの回顧的視点によって現実性や臨場感がもたらされるという特質が明らかになった。また、FH は単なる事行実現の提示だが、FP は事行の提示に加えその動きが現在既に始まっていることを暗示したり展開の動きを感じられることは、使い分けされる大きな理由の一つであろう。これら特質が継起的に語るだけで平坦な語りになりそうな歴史テキスト内でのスパイスとなっていると考えられる。本稿では2つのテキストのみをコーパスとして用いたため、今後は本稿で明らかになったと思われる仮説をより多くのテキストをもって観察・確認する必要がある。また、歴史テキストで未来の事行を表す際に用いられる他の動詞時制である条件法に関しても、また別の機会に論じたい。

参考文献

- Barceló, G.J. et Bres, J. (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Benveniste, E. (1966) : *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard.
- Benveniste, E. (1974) : *Problèmes de linguistique générale II*, Gallimard.
- エミール・バンヴェニスト (著)・阿部宏 (監訳)・前島和也ほか (訳) (2013) : 『言葉と主体—一般言語学の諸問題—』岩波書店.
- Leeman-Bouix, D. (2002) : *Grammaire du verbe français : des formes au sens – Modes, aspects, temps, auxiliaires*, Nathan.
- Grevisse, M. (1975) (1986) : *Le Bon Usage*, Duculot.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- Maingueneau, D. (2010) : *Manuel de linguistique pour les textes littéraires*, Colin.
- Martin, R. (1971) : *Temps et aspect*, Klincksieck.
- 小川紋奈 (2016) : 「歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形の機能に関する研究 — La Proclamation de la Commune をコーパスとして—」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』31, pp.25-79.
- Riegel, M, Pellat, J.-C, et Rioul, R. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France.
- Touratier, C. (1996) : *Le système verbal français*, Colin.
- Wagner, R. L. et Pinchon, J. (1962) : *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette.
- 渡邊淳也 (2014) : 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.

文例出典

- Lefebvre, H. (1965) : *La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871*, Gallimard.
- アンリ・ルフェーヴル. (著)・河野健二ほか(訳) (2011) : 『パリ・コミューン』(上)(下), 岩波書店.
- Pernoud, R. (1981) : *Jeanne d'Arc*, Presses Universitaires de France , « Que sais-je ? ».
- レジーヌ・ペルヌ(著)・高山一彦(訳) (1995) : 『ジャンヌ・ダルクの実像』, 白水社.

(おがわ あやな / 文芸言語専攻 5 年)